

Title	編集後記 奥付
Sub Title	
Author	植木, 憲二
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.8 (1952. 8)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520801-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

tural parameter が不變であるというのと同じことを意味する。何故なら S_{12} は模型の分布 f_{12} から導かれるものであるから。勿論模型に於ける擾亂要素 w の分布 f_w が可成り安定したものであるという假定は容認してもよいであろう。併し、模型における方程式のパラメータベクトル θ は左様に安定したものであるという保証はない。従つて S_{12} は安定的な分布であるということも同じく保証されないのではないか。そしてこの問題は自律的な理論模型の構成を要請する故に、再び、ことに考察した様な方法を必要とするのである。論理の鎖は連つてゐるが循環論ではない。

次に identification (識別) identifiable な模型は non-identifiable な模型に比して、より良く現實を反映するのだという根據はどこにも見當らない。實驗装置を使用出来る場合には両者が共に現實を反映する同等の資格をもつ。何れのパラメータも實驗により決定出来るからである。一方、經濟關係に於ては Structural parameter を決定出来る様な Structure は常に identifiable でなければならぬ。即ち現象の把握に於いて或る限界を感じるのであるが、斯様な問題は本稿の範圍を逸脱するであろうから筆者の疑問として記すに止める。^(註5)
(註5) クラインもこの點については次の様に述べているに止まる。「眞實の方程式系のパラメータは identifiable であるかも知れないし、ないかも知れない。併し乍ら、もし或る

變数が方程式系の中から省かれたために、又は方程式系が正しくないために、identifiable な系が得られないといふのであるならば、吾々は經濟理論を用いる事によつてその系が眞實を表わす様に改良しなければならぬ。もしかしてえられた眞實を表わすと考えられる系が、パラメータの identification を許容するものならば、吾々はパラメータの推定へ進むことが出来るのである。』(Economic Fluctuations in the U. S., 十頁の脚註)

(註) T. Haavelmo; "The Probability Approach in Econometrics," Econometrica, vol. 12(1944), Supplement. なお三川學會雜誌第四十四卷第一號 辻村江太郎氏による同書の書評参照。

(三十七年二月)

編集後記

世界が今日ほど深刻な不安と焦燥に満ち、昏迷と絶望の淵を彷徨したことは嘗てなかつたであろう。まさに現實は、國の内外を問はず、一見些細に映ずる事象が自ずから國際的性格を擔わざるを得ぬような新たな世界史的段階に突入してゐる。學問がその研究に當つて、現實から遊離したものであつてはならぬとすれば、かゝる認識と基礎は何にも増して不可欠な條件であると言わなければならぬ。けれども事實は、或は學問を現象の理解と説明のための具と規定し、この立場より現象の平板的な撫で廻しに終る人々があり、或は先學の片言隻句を絶對的に固定化し、その引照で文を飾ることを以て誇りとする傾向があり、或は「象牙の塔」の稱に酔つて、超歴史・現實的態度で終始することを以つて事足れりとする人々がある。これ等古いジャンルの學風は、學問本來の使命の忘却として責められるばかりか、無意味な高等遊戯として、須臾も休まない社會の推移から取り残されてしまふであらう。

われわれ學徒が敢て自省し、改めて正しい學風を樹て、世に寄與するといふ現實的要請の切望されてゐる所以である。このことはわれわれの社會に對する義務であり、これなしには學問は單なる超絶的存在に過ぎず、氣まぐれな冥想を呼び、煩わしい饒舌を醸し、我慢のならぬペダントリイを誘ふものでしかないであらう。われわれの課せられた責の重要さに、快い誇りと、強い義務とを再び認めたい。
(植木憲二)

昭和二十七年七月二十五日印刷	昭和二十七年八月一日發行
第四十五卷	定價 七拾圓
第八號	送料 四圓
編輯者 高村象平	東京都港區芝三田慶大經濟學部内
發行所 圖書印刷株式會社	東京都港區芝三田豐岡町八
印刷所 川口芳太郎	
豫約購讀料	一年分 金八四〇圓(送料共)
	半ヶ年分 金四二〇圓
發行所	東京都港區芝三田二丁目 慶應義塾大學經濟學部研究室内 慶應義塾經濟學會